

◇ 国 語

国3-1～国3-19まで19ページあります。

※推薦入試B（12月14日実施）国語 第二問につきましては、著作権の都合上、
割愛させていただきます。

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

私は高校時代、文芸批評家の小林秀雄の文章を読むのが好きだった。「もう少しわかりやすくすっきり言いたいことを書けばいいのに」と思いながらも、決めゼリフ風の文体にカツコウ↑よさも感じていたりした。読んでいるうちに、自然に小林から古典の読み方を教わった。

有名な「無常という事」という短文からも、古典力を学んだ。この短文は、「一言芳談抄」という鎌倉時代の文章の引用から始まっている。比叡の御社（山王権現）で若い女房が夜中に鼓を打ちながら、うたっている。この世のことは無常なので後の世をたのむ気持ちでそうしている、というシユシ↓の文だ。

面白いのは、小林が実際に比叡山の山王権現に行き、「ぼんやりと」うろついていると、「突然」この文章が当時の絵巻物を見るように心に浮かんだ、ということだ。

「ぼんやり」している時に「突然」、古典の文が心にありありと浮かんでくる。この突然の浮上の快感は、古典になじんでおいた恩恵だ。あらすじを読んだだけでは、この不思議な浮上は起こらない。原文が体の中に残っているから、意識しなくても浮上してくる。引用しようとして、思い出すのとは違う。ふと心に浮かぶ瞬間は、ぜいたくだ。自分でも「あれ、なぜこの古文の節がふと出てきたのだろう」と思う瞬間は、自分の内に埋めておいた宝の箱が、忘れた頃に地上に出てくるような、祝祭的な経験だ。

この場合は、比叡の御社という場所が、古文の浮上のきっかけとなった。そこで感じたのは、おそらく鎌倉時代の無名の若い女との魂の交信である。鼓を打ちながらうたう女の真情に直接触れた気のするような、深い共感的理解が起こった。現代人が「やっぱりこの世は無常だね」と軽々しく言うときの不確かな無常観（というより無常気分）に対して、小林がふだん持っていた疑念が、古文の一節によってフンシユツ↓した。

もつとたしかかな無常観がかってあったのだ、という確信がふと得られた。この確信が、「無常という事」のラストの決めゼリフ、「現代人には、鎌倉時代の何処かのなま女房ほどにも、無常という事がわかっていない。常なるものを見失ったからである」を生む。

遠く離れた時代の名も知らぬ人の心の奥底にある感慨に触れ、共感する経験は、私たちが現代のこの世に生きる意味を深くしてくれる。私たちは、現代人だけつき合うと思わなくてもいいのだ。古人との魂の交感の方もありうる。いや、むしろ古人との関係の方が「魂」と言いたくなる領域における交感^三は成立しやすい。古人は歴史の中でたしかかな者として存在しているので、日常にまぎれることなく、深いところで共感しやすいのかもしれない。

古人の思いがたしかなものとしてブレずにそこにあるとするならば、それは自分で自分の思いを知る相手として望ましい。壁にボールを投げ、そのはね返り方や衝突音から、自分の調子を知るようなものだ。あるいは、壁に触れて自らの掌の感触を知るようなものだ。

時は多くのものを押し流してゆく。それぞれの時代に生きたボウダイ^四な人の思いは、ほとんどの場合、跡かたもなく消え去る。しかし、古典として残った文章に込められた思いは、形あるものとして私たちの目の前に現れる。

時代を隔てれば隔てるほど、感覚のずれを感じるはずだ。しかし、そうはならないのが古典のいいところだ。しかもひとたび共感を感じれば、「こんなに時代を隔ても思いを分かちあえた」と感慨にふけられる特典もある。

古典(古文)は一種の「魂の避難所」としての役割を持っている。現在の状況で追い込まれ、行きづまりを感じたり、居場所や仲間がいないと感じる^三ときほど、古典に浸るチャンスは生まれる。

小林秀雄が「平家物語」、「徒然草」、「実朝」などの古典の批評を書いていたのは、昭和十七、八年、まさに戦時中だった。「戦時中に古文の批評とは、変わっているな」と高校時代には思ったが、むしろ戦時中だからこそ、自らの拠つて立つべきところを求める思いが高まっていたともいえる。

周囲の人間と同調し、同じ空気で時代に流されてゆくよりは、遠い古人との魂の共鳴を求める気持ちは理解できる。私たちも行きづまったときに、周囲の人間に相談を持ちかける志向だけでなくいい。古典の世界に浸ることで静かに自分を見つめる「時」が避難所となる。これは、古典力によって人生の危機を自ら救うということだ。

古典を楽しむコツの一つは、「古典」という一くくりでまとめてしまわないことだ。見慣れていない民族の顔は、似たように見えてしまいがちだが、見慣れてくるうちに一人ひとりの顔の個性の違いがわかるようになる。

古典にも一つひとつ顔がある。「なんとなく古い文章だなあ」という印象で「古典(古文)」という一つの箱に詰めこんでしま

うと、違いが見えてきにくい。しかも、高校の古文の授業が終わり、受験も通り過ぎると、「古典」という箱自体を自分の心の押し入れの奥深くにしまいこんでしまい、再び開けることもない人も多い。

「古めのものはとりあえずこの箱に詰めこんで」という考えを変えて、一つひとつの古典の顔をゆっくり眺めてみることにする。すると、好みの顔が自分でもわかってくるようになる。

小林秀雄は「徒然草」という四ページほどの文章で、徒然草、および兼好法師の「顔」は特別なものだよ、と言っている。

たとえば有名な冒頭。「徒然なるままに」という書き出しから、後世の人が「徒然草」という書名を付けた。感じが良い上に覚えやすい、一見上手なネーミングに見える。

しかし、落ちついて最後まで、この冒頭の一文を読めば、「怪しうこそ物狂ほしけれ」というのだから、「徒然草」という言葉から受けるイメージとは、ずいぶん違う。「物狂ほし草」というタイトルでは人気は出なかったかもしれないが、筆を手にしたとたん、書きたいことであふれて苦しくさえなってしまう兼好の気持ちは、この方がよく伝わる。

ドウサツリヨクEがありすぎて苦しくさえなる。この感じが「徒然草」というおしゃやかなタイトルでは、かえって伝わりにくい。小林は、このタイトル付けについて、「どうも思い付きはうま過ぎた様である。兼好の苦がい心が、洒落た名前の後に隠れた」と指摘し、「兼好にとつて徒然とは「紛るゝ方無く、唯独り在る」幸福並びに不幸を言う」と書いている。

『徒然草』というタイトルからなんとなくイメージを作ってしまった、本当の顔を見ずじまい、というのではもったいない。

小林に「兼好は誰にも似ていない。よく引合いに出される長明などには一番似ていない」と言われて、『方丈記』と比較して読んでみると、たしかにまったく見ているものが違う。

古文の教科書では、同じグループのように並んでいるが、まったく質の違うものなのだ。「枕草子」との類似なぞもほんの見掛けだけの事」だと言われて、比べてみると、たしかに違うものだ。

イメージで決めつけない。「古典」や「随筆」という ア で一くくりにしない。この「決めつけないでしっかり実際に目の前にあるものを注意深くみる」という姿勢は、フッサールの現象学にも通じる。先入見を排することで、ずいぶんと現物の感触が味わいやすくなる。

ただ、有名な作品ほど、どうしてもイメージが先行し、知っているつもりになってしまう。たとえば『平家物語』は、どんな

イメージで一般に捉えられているだろうか。一番に思い出すのは、冒頭の「祇園精舎の鐘のこえ、イ 無常のひびきあり……」だろう。「平家物語」といえば、無常感」という図式ができあがってしまった。しかし、無常感といえは、『方丈記』も『蜻蛉日記』も同じグループに入ってしまう。しかし、『蜻蛉日記』と『平家物語』では、ぜんぜん違う。

那須与一が扇を射る場面（扇の的）など、実にダイナミックで、「ザ・活劇」という勢いがある。小林秀雄は、宇治川の合戦のラストには「勇氣と意志、健康と無邪気とが光り輝く」という。畠山重忠に川の中で助けられ、陸へほうり上げられた大串の次郎が、自分が先陣だと名乗りをあげる場面は原文ではこうなっている。

「投げ上げられてたどなほり、太刀をぬいて額にあって、大音声だいおんじやうをあげて、武蔵の国の住人大串の次郎重親、宇治川の歩たちから立の先陣ぞや、とぞ名乗つたる。敵も御方みかたもこれを聞いて、一度にどつとぞ笑ひける」。

助けられてもらつてようやく岸に上がったのに、先陣の名乗りをあげる。若者の無邪気さに敵も味方もいっしょにどつと笑う。そして戦闘が始まる。映画のワンシーンとして目に浮かぶ文章力だ。

小林は、「込み上げて来るわだかまりのない ウ が激戦の合図だ。これが「平家」という大音楽の精髓である。「平家」の人々はよく笑い、よく泣く。僕等は、彼等自然児達の強靱きやうじんな声帯を感じる様に、彼等の涙がどんなに塩辛いかも理解する」という。

つまり、『平家物語』の精髓は、そこで生きて動く人間たちの肉體性、身体であり、その生きいきした身体を情景とともに見事に描写する日本語の力だ、ということだ。

それが『平家物語』の魅力だとすると、冒頭の無常感という仏教思想とは、ずいぶんイメージが違ってくる。

『平家物語』といわれて、冒頭の「祇園精舎の鐘のこえ」しか思い出せないとすれば、せつかく箱入りのおいしいお菓子をもらったのに、ウ箱だけ見て終わっているようなものだ。中身を味わわなければもったいない。

現代の私たちは、暗誦あんじやうというといついでに冒頭を少しだけ覚えるのにせいっぱいだ。だから、冒頭という箱のイメージばかりが強くなる。冒頭が名文の場合、暗誦にはもちろん意味はある。が、中身の名場面の二、三を暗誦できていると、菓子の味を満喫できた気分になれる。

（齋藤 孝『古典力』による）

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選ぶ。

A カツコウ

- ①薬のコウノウ
- ②コウミョウな手口
- ③コウオの態度
- ④ビコウの診察
- ⑤経済についてのロンコウ

1

B シュシ

- ①ユウシを募る
- ②キカンシの炎症
- ③ジョウシの命令
- ④ゲシの日
- ⑤ヨウシをまとめる

2

C フンシュツ

- ①火山のフンカコウ
- ②フンキして成績をあげる
- ③何とも言えないフンイキ
- ④有名人のフンボ
- ⑤からかわれてフンガイする

3

D ボウダイ

- ①ボウケンの旅に出る
- ②ボウチヨウする宇宙
- ③仕事にボウサツされる
- ④ボウシヨで会う
- ⑤裁判をボウチヨウする

4

E ドウサツリヨク

- ①ゴウドウで演奏する
- ②セイドウで出来た仏像
- ③ドウコウがひらいている
- ④飛行機のドウタイ着陸
- ⑤中がクウドウになっている

5

問二 空欄 ・ ・ に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選ぶ。

①文学 ②比較 ③固定観念 ④帰納方法 ⑤方法論

①万物 ②情緒 ③盛者 ④諸行 ⑤離別

①哄笑こうしょう ②失笑 ③一笑 ④嘲笑 ⑤微笑

問三 傍線部(一)「深い共感的理解が起こった」とは、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選ぶ。

- ①鎌倉時代の若い女が鼓を打ちながらつづやいている言葉に、現代人と同じ「無常」を感じ、小林が深く共鳴して受けとったということ
- ②鎌倉時代の若い女がもつ、この世の「無常」の確実性を、現代人にはないものとして、小林が深く共鳴して受けとったということ
- ③鎌倉時代の若い女がうたっている言葉の中に、この世の「無常」が力強くこめられていることに、小林が深く共鳴して受けとったということ
- ④鎌倉時代の若い女がもつ、この世の「無常」のすばらしさが、現代人にはないものとして、小林が深く共鳴して受けとったということ

問四 傍線部(二)「古人との関係の方が「魂」と言いたくなる領域における交感は成立しやすい」とは、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

10

① 古人の深い思いが確固としたものとして古典の中に多くふくまれているので、現代人とつきあうより、それを読むことで、私たちは古人とのつきあひも長つづきができる。

② 古人の深い思いが確固としたものとして古典の中に多くふくまれているので、それを読むことは、日常にまぎれる私たちの心をいやしなぐさめてくれる。

③ 古人の深い思いが確固としたものとして古典の中に多くふくまれているので、それを読み、共感することは、この世に生きる意味を深くしてくれる。

④ 古人の深い思いが確固としたものとして古典の中に多くふくまれているので、そのブレのなさが、時代をへだてても、私たちが自分をぶつける対象でありつづけることができる。

問五 傍線部(三)「古典(古文)は一種の「魂の避難所」としての役割を持っている」とは、どういうことか。その説明として適当でないものを、次の①～④の中から一つ選べ。

11

① 古典は、激動の時代に、それを読むことで、自分を静かに見つめ、人生の危機を救うことになる役割をもっているということ

② 古典は、居場所や仲間がないと感じる孤独な時、自分をなぐさめ救ってくれる役割をもっているということ

③ 古典は、周囲の人間や、激動の時代に、同調したり反発したりする役割をもっているということ

④ 例えば、小林が古典を戦時中に読むことは、その時代に対して一つの拠って立つところを求める役割をもっていたということ

問六 傍線部(四)「古典」という一くくりでまとめてしまわないことだ」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適當なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

12

- ① 古典には、読む人の好みの顔がいろいろあるから
- ② 古典には、作者の顔と作品の顔とがちがったものがあるから
- ③ 古典は、自分の心の押し入れに奥深くしまいこんでしまうものだから
- ④ 古典は、一つひとつがちがった独自の顔をもっているから

問七 傍線部(五)「本当の顔」とは、どういうことか。その説明として最も適當なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

13

- ① 『徒然草』には、書きたいことがあふれて苦しくさえなってしまうという、作者の物の見えすぎる目があるということ
- ② 『徒然草』というタイトルは、「徒然なるままに」という冒頭の書き出しから決められたものであるということ
- ③ 『徒然草』は、同じ随筆の『方丈記』や『枕草子』とは、個性や書き方が少し類似しているということ
- ④ 『徒然草』の書き出し「徒然なるままに」とは、何もすることがなく退屈なのにまかせてということ

問八 傍線部(六)「箱だけ見て終わっているようなものだ」とは、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

14

- ①『平家物語』の冒頭の文章から、無常感と仏教思想だけを取り出し、全体のストーリーを見ないで終わってしまうこと
- ②『平家物語』は、宇治川の合戦のシーンが最も印象的で、冒頭の有名な文章の無常感などは関係なくなってしまうこと
- ③『平家物語』は、冒頭の文章が名文のため、そこだけを覚え、暗誦してしまうこと
- ④『平家物語』は、冒頭の文章と無常感だけを思いおこさせる作品であるため、内容の「活劇」の名場面と生きて動く人間の肉体性を見ないで終わってしまうということ

問九 本文の内容に合致するものを、次の①～⑦の中から二つ選べ。

15

16

- ①兼好の『徒然草』と長明の『方丈記』は見かけだけは類似している。
- ②『平家物語』は無常感の文学だと、小林秀雄は言っている。
- ③有名な古典の冒頭を暗誦するのは、内容を知るためにも大切なことである。
- ④筆者は、小林秀雄から古典の読み方を教わった。
- ⑤古典のタイトルからイメージを作ってしまう、その作品内容の本当の姿を見ないのは惜しいことである。
- ⑥古典は時代を経た古いものであるから、感覚のずれを感じるものである。
- ⑦「一言芳談抄」を書いたのは、小林秀雄である。

第三問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

人はなぜ書くのか？

あるがままの人生に満足できないとき、現実に対して違和感を覚えているとき、人は小説や詩などの創造的言語を書く、とノーベル賞作家のバルガス・リョサは言う。

となると、小説や詩は、書き手がかくあれかしと願う人生あるいは世界を何らかの形で表現したものになるのだろうか。でもそれが、やはり各々まつたくちがう形で、わが人生かくあれかしと望む読者を惹きつけ、リアリティを感じさせるというの(こ)は不思議な気がする。

人の「書きたい」という衝動はいったいどこから来るのか？

小説や詩の書き手は、何よりもまず小説や詩の読み手である。

ある物語なり詩を読む。惹きつけられる。衝撃を受ける。すっかり魅了される。何度も読む。あるいは一度読んだだけだがずっと心に残る。そのうち自分も同じような、つまりその本を読んで自分が得たのと同じような感覚を再びもたしてくる物語を作ってみたいと思うようになる。子供が言葉や遊び方を覚えたりするとき、模倣したいという欲望を喚起するのは周囲の大人や友達存在である。創造行為の場合は、それが他者の書いた言葉になる。

書きたいという欲望は、たくさん読んでいるかどうかとあまり関係がない。出会いのインパクトこそが重要なのである。とはいえ、前言と矛盾するようだが、一発で自分の人生に深い痕跡を残してくれる本には出会えるものではない。やはり〈ある程度〉は読んでいなければ、衝撃を衝撃として受けとめる素地は形成されえないと思う。

注意を込めて読むことで、他者の言葉に対する自分なりの判断力や感受力の基盤が形成される。また、その基盤も決して一度きりで形成されるものではなく、人生経験を積むにつれて〈自分〉は変化していくのだから、読み方自体も変化し、本を読む(読み返す)ことで、言葉との実り多き出会いが更新されていく。

人間の社会とは何よりも言葉で成り立っている。テクノロジーが発達し、いま見た画像を瞬時に友人に、それどころか無数の他人に見せることができるようになったとはいえ、残念ながら我々は言葉によってしか自分の思考や感情を伝えられない。

商談であれ、学会発表であれ、外交交渉であれ、言葉で行なわれる。映像や画像はあくまでもその補助的な役割しか果たせない。ある画像を見ると、「ああ、これね」と「わかった気がする」。その意味で映像、そして音楽も「直接性」の体験である。だがこの「私」自身の固有の体験、「わかった」内容は、言葉によつて「媒介」されなければ、他者には共有されない。

目にした瞬間、聞いた瞬間に自分を襲った感動や悲しみがうまく伝えられないとき、「言葉にならない」筆舌に尽くしがたいと我々はもどかしく感じる。だが、それは言葉が必要だということの何よりの証だ。言葉にできないからこそ、試みなければならぬのだ。でなければ、せつかくの体験も永久に「私」に閉じ込められたままである。

読むことで、我々は絶対に入り得ない他者の「内面」に入ることができる。そして書くことで、今度は自らの「内面」を他者に伝え、同時に自己と自己の生きる現実を相対化して眺めることができる。言葉は我々を解放する。

(小野正嗣の文章による)

問一 傍線部(一)「不思議な気がする」とあるが、なぜ不思議な気がするのか。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

32

- ① 人生や世界に対して理想と現実の落差に悩む読者が、小説や詩などの創造的言語を書くことによって、本来の書き手をも感動させるから
- ② 書き手が小説や詩に表現した理想の人生や世界と、それぞれに全く違う考えを持つ読者が、その小説や詩を読んで感動するから
- ③ 読者が抱く、生きる人生や現実に対する不満と違和感を、虚構によって解消することを願って書かれる創造的言語は、書き手の人生観や世界観を裏切っているから
- ④ 多様な人生観と世界観を持つ多数の読者のそれぞれが、ひとりの書き手が表現する人生と世界の理想像に共感するから
- ⑤ 小説や詩などの創造的言語は、書き手の理想の人生や世界を表現しているに過ぎないにもかかわらず、読者にとっても理想の人生や世界として読まれるから

問二 傍線部(二)「直接性」の体験」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

33

- ① 映像や音楽を言葉なしに直に見聞きすること
- ② 映像や音楽を再生機器に頼らず鑑賞すること
- ③ 映像や音楽を即座に理解した気になること
- ④ 映像や音楽に固有のしかたで共感すること
- ⑤ 映像や音楽を言葉の媒介により認識すること

(次のページにも問題があります)

問三 この文章の意図の要約として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

34

- ① 自他の固有の体験を共有し合い、感動や悲しみを伝えるためには言葉の媒介なしには不可能であり、言葉がなければ、他者との関係性も閉じ込められたままとなり、自己を解放する可能性も制限される。
- ② 人が小説や詩などの創造的言語を書く衝動を喚起されるのは、他者によって書かれた創造的言語への共感と模倣の願望であるから、書くことにより他者との関係性をうまく保ち、自己を解放することができる。
- ③ 言葉によって成り立っている社会において、本を読むことで、思考や感情を伝える道具としての言葉との実り多い出会いが保証され、他者の言葉を適切に判断し、感受性も磨かれる以上、人生経験に応じた読書が不可欠である。
- ④ 社会を成り立たせている言葉は、小説や詩を読み、また書くことで他者の内面をうかがったり、自己の内面を他者に伝えたりすることを通じ、他者との関係性において自己と自己の生きる現実を捉えることを可能にし、自己の解放に導く。
- ⑤ 理想の人生を願うなら、小説や詩などの創造的言語がある程度読み、また読み返す経験を積んでいく過程で、言葉に対する判断力や感受力の基盤を形成する必要がある。